国際社会文化研究所紀要　第7号（2005年）

「記憶の不在」は「忘却」か？
―― 高次脳機能障害者共同作業所における想起コミュニケーション分析 ――

松 島 恵 介*

Is "absence of memory" equivalent to "oblivion"?
Analysis of co-remembering in cooperating workshop by people with higher brain dysfunction.

Keisuke Matsushima*

We usually regard "absence of memory" as oblivion. But actually it is not true. For example, the person who is trying to remember is in a state of "absence of memory", but this person doesn't forget perfectly (∵now he is in a state of "trying to remember"). Thus, in our daily life we sometimes encounter a paradox between forgetting and remembering.

This article discusses the use of this paradox by analysis of co-remembering in co-operating workshop by people with higher brain dysfunction.

はじめに

記憶の研究者である筆者が，高次脳機能障害者[1]が集う作業所「コロポックル」[2]でのミーティングをはじめて観察したとき，ある種の戸惑いを覚えずにはいられなかった。「記憶をはじめとする高次の認知機能に障害をもつ」と聞かされていた彼らのやりとりは，予想に反して，滞りなく円滑に行われているようにみえたのであった。そればかりか，筆者にとっては，ボランティアとしての参加者（健常者）と障害当事者の区別さえも困難であった。

こうした印象をさしあたり筆者の専門領域から述べるなら，彼らが想起活動において大きな滞りを露わにしない，すなわち，彼らが「忘れる存在」としてみえてこない，ということができる。

「忘れる」はずの者が「忘れない」者として現れてくるのはなぜか。

本稿では，まず，「忘れる」とはいかなることか，現象そのものに立ち返って考えることを試み，その後に高次脳機能障害者の行う想起コミュニケーションを仔細に分析することから，この問いに何らかの答えを導くことにしたい。

1　忘れることと思い出すこと

「忘れる」とはそもそもどのような状態のことをいうのだろうか。

＊ 龍谷大学社会学部

作業所「コロポックル」における具体的なやりとりを分析する前に，日常事例を挙げながらこのことを改めて考えてみることにしたい。

さて，ごく一般的に，「忘れる」とは「かつてあった記憶がある」ことの反対の意である，と連想するのはたやすいだろう。すなわち，「忘れる」とは，単に「かつてあった記憶が『ない』」状態である，と。しかし，これは必要十分な定義といえるのだろうか。

反証となる事例をあげてみよう。以下に挙げる事例に登場する甲氏は「かつてあった記憶がない」状態であるが，果たして彼は「忘れている」と言い得るだろうか。

【事例１Ａ】

甲「あのとき乗った電車，何色だったっけなあ，えーと，あれなんだっけ，うーん，ええと，ええと…。」

甲氏は，たしかにこの場面では「かつての記憶がない」。しかし，それだけで甲氏を「忘れている」と決めつけるのは誤りであろう。ここでは甲氏の行為に注目しなければならない。彼は「思い出すという行為を続けている」のである。したがって，厳密には，甲氏は「忘れている」のではなく「思い出しつづけている」，といってよいだろう。ここには「想起の持続」がある。

先の「忘れる」という語の定義を思い起こそう。「忘れる」＝「記憶がない」という等式は必ずしも常に成立するわけではない。上の事例に照らせば，この定義は，たんに，記憶の不在という「状態」に関する説明に終始しているのであって，思い出すという「行為」と，それが「持続」していること，についての視点が欠如している。

ここでただちに思い起こされるのは，西阪（2001）の認識および想起にかんする研究である。西阪（2001）は，ライル（Ryle，1949）の議論をひきながら，「記憶をもつ」・「想起する」といった表現は，達成もしくは成功を表すものであると述べる。

この見方にたてば，上に挙げた，想起の「持続」という事例は，想起が「達成されていない」あるいは「成功していない」例とみなすことができるかもしれない。ただし，こうした「ない」という否定を含む表現は，従来「記憶の失敗」といった否定的ニュアンスで捉えられてきた「忘却」を連想させやすい為ここではこうした用語法を採らない。注意すべきは，上記の事例は，たんに「想起が達成されなかった」あるいは「想起が成功しなかった」事例なのではない，ということである。後述するように，こうした「失敗」状況は，「この時点までこれだけの想起が出来なければ失敗である」という条件を定めようとする者の存在がなければ発生しない（すなわち，一生涯孤独に想起『し続ける』状態を実現することも可能である。もちろん，逆に自ら忘却を宣言することも常時可能ではある）。

上記の事例が端的に表すのは，「想起が未だ達成されていない」あるいは「想起が未だ成功していない」こと，すなわち，「まだ想起の途上である」という事態なのである。したがって，ここでは「想起の持続」という語を用いてこの事態を表現する。

ここで，これまでに明らかになったことを箇条書きに整理しておこう。

①ある人物の記憶の不在は，必ずしも「忘却」ではない。
②ある人物の記憶の不在は，「想起の持続」である可能性がある。

2　コミュニケーションにおける忘却

本稿で採用するもうひとつの視点は，「忘却」が，対話者同士のどのような共同的作業によって成し遂げられるか（あるいは，成し遂げられないか），という点にある。

先ほどと同様に問い掛けてみよう――忘却とは，どのようにして成し遂げられるのか。それは，「ひとりで」成し遂げられるものか。

具体的に事例を検討してみよう。

【事例１Ｂ】
甲「あのとき乗った電車，何色だったっけなあ，えーと，あれなんだっけ，うーん，ええと，ええと…。」
乙「あなた，忘れちゃったの？」
甲「…うん。でもちょっと待てよ，えーと，なんだっけ…」

先の事例に加えられたのは，甲の状態に対する乙の「忘却である」とする刻印（ラベリング）と，それにたいする甲の承認（『…うん。』）のみである。しかしこのことによって，先の事例で出現しなかった甲の「忘却」は事実として現れたといってよいだろう。

具体的に述べるならば，次のようになる。この対話においては，甲に対して乙が「忘却」のラベリングをし，それを甲が拒絶しなかった，ということによって，「甲の忘却」が両者において共通の事実として露わになった，ということができよう（ただし甲は直後に，『えーと，なんだっけ』と想起を続けているから，この『忘却』としてのあらわれは一時的なものである可能性がある。この可能性については別稿で詳細に論じたい）。

したがって，以下のように，甲が乙のラベリングに対し拒絶をするのであれば，甲の忘却は両者において事実として現れることはない。

【事例１Ｃ】
甲「あのとき乗った電車，何色だったっけなあ，えーと，あれなんだっけ，うーん，ええと，ええと…。」
乙「あなた，忘れちゃったの？」
甲「いや。うーん，なんだっけ，ええと，ええと…」

ここでは，甲によって「いや。」と却下された乙の忘却のラベリングは，未遂という結果におわっている。したがって，甲は，この時点では「忘却していない」ということができるだろう。

この事例から逆に先の事例１Ｂを捉え返すならば，１Ｂにおける忘却は，両者の共同作業によって成し遂げられた，ということがより鮮明になるはずである。「乙のラベリング」と「甲の承認」

のいずれかが欠ければ，忘却は成し遂げられなかったわけである。

これまで挙げたすべての事例においては，甲の「記憶の不在」という状態は共通している。しかし，「記憶の不在」は，他者とのやりとりのなかで，「忘れる」ことにもなりうるし，「忘れていない」ことにもなりうるのである。

ここで，前節で整理しておいた命題を再び参照してみよう。

①ある人物の記憶の不在は，必ずしも「忘却」ではない。
②ある人物の記憶の不在は，「想起の持続」である可能性がある。

本節においてコミュニケーションという観点を導入したさいに明らかになったのは，以上の命題に次のような変形が生じる，ということである。

①－A　ある人物の記憶の不在は，「忘却である」ということもできるし，「忘却ではない」ということもできる。そのいずれかは，対話過程において決定される。
②－A　ある人物の記憶の不在が，対話過程において「忘却ではない」とみなしうるとき，それは「想起の持続」である可能性がある。

＊　　＊　　＊

以上のように，忘却という現象の成立を問うには，単に主体の頭の中の「記憶がない」という状態について言及するだけでは十分でない。想起する主体の「行為（発話）」とその場に参加する「他者」とのやりとりという要素を抜きにして考えることはできないのである。

次節以降においては，こうした問題意識を分析の枠組みとし，実際に高次脳機能障害者作業所におけるやりとりをみていくなかで，どのようにして「忘却」が成し遂げられるか／成し遂げられないか（冒頭で述べたように，本稿の関心は特に後者にある），考えていくことにしたい。

3　高次脳機能障害者作業所「コロポックル」における会話の分析

3-1 「コロポックル」における「終わりの会」

筆者が観察し，会話データを得た高次脳機能障害者作業所「コロポックル」は，札幌市にある日本でも数少ない高次脳機能障害者が集う小規模作業所である。高次脳機能障害者の通所者（以下『メンバー』と呼ぶ）の数は日により増減するが，平均すると凡そ７，８名程度である（観察当時）。

以下において分析される会話断片は，当該作業所において一日の終了時に行われる「終わりの会」からの抜粋である。「終わりの会」では，コロポックルの生活指導員（以下，『指導員』と略記）の司会のもと，各メンバーに対して，その日なされた活動や昼食のメニュー等の想起が促され，指導員がそれを記録（ノート）に留めるという作業が主として行われる。

3-2　データ分析にあたって

以下において分析されるのは，2001年９月X日および2002年９月Y日の「終わりの会」の会話である[3)]。

本論の関心にしたがい，会話において「忘却」が問題になるような場面をピックアップするために，まず，両日において「今日したこと」の想起を促される場面において，メンバーの発話に３秒以上の滞り（無発声状態含む）が見られるか，あるいは「忘れた」・「思い出せない」といった忘却関連語が用いられていた場面を全て抽出した。結果として以下の２つの会話断片（会話断片１，会話断片２）が抽出された。次節から順を追って分析する。

なお，以下の断片に関する分析においては，「ほんとうは，彼（彼女）は～と内心思っているかもしれない」といった，隠された内面を推測するような言及はいっさい行われない。ここでは，どのような形式によって会話が遂行されているかを観察することに徹し，それらから妥当な分析を導くことを主眼とする。主観による「内面の推論」の作業は，無限の解釈を生むと同時に，議論の無限後退を生じさせることになるので，安易に行うことはしない。

3-2-1　【会話断片１】の分析

3-2-1-1　はじめに

本節において分析の対象となるのは，2001年９月X日の「終わりの会」における会話である。

当日の参加者は，東山，旗本，朝日原，川田，田辺指導員，小原指導員，木村（ボランティアの健常者），唐多指導員である。（全て仮名。なお，以下に用いられる固有名詞もすべて仮名である）

先に述べたように，この日の会合において忘却が問題になるような場面は，以下にあげる会話断片１のみであった。まずはその内容をみていくことにしよう。

（発話者の前の数字は行数をあらわす。なお，断片において用いられている各記号については，文末の注4)を参照のこと）

3-2-1-2　会話断片１

【会話断片１】

1 唐多：えーと（.）今日の（.）今日何をやったかに（.）の（0.6）えー（.）をお聞きしたいんですけどもよろしいでしょうか？（1.0）んーと（.）朝（.）午前中になんか（.）なにをやっておられましたでしょうか？

2 東山：封筒の（.）（1.0）差出人のラベルつくってました

3 川田：┌そうじ

4 唐多：└（それ）

5 川田：そうじ

6 唐多：ちょっとまって（.）えーと（.）（1.0）う：んと（.）封筒の？

《唐多：ノートに記入する》

（1.0）

7 東山：差出人::

8 唐多：封筒の差出人ラベル

9 東山：はい

(1.0)

10 唐多：さ:し:だしにんラベル（1.2）ラ:べ:ル（.）作成

《唐多：ノートに記入する》

11 東山：作成（.）貼り付け

12 唐多：は:い（1.6）貼り付け（1.4）は:りつけっと（2.4）で（.）えっとそうじ？

《唐多：ノートに記入する》

13 川田：うん

14 唐多：あいた:ビルのそうじと（.）川田さん（.）午前中ですね（.）はい（.）他になんか

《唐多：ノートに記入する》

《唐多：右方（視線の先は不明）をみつめる》

やったとかっいうの，方いらっしゃいます？（1.0）（1.0）（1.0）

《唐多：左方の東山を見つめる。東山：唐多に視線を合わせると体をビクっとさせる》

15 唐多：川田さんずっとこれ（で）東山君はほかになんかなかったでしたっけ？

16 東山：ん？

(5.0)

17 唐多：なに（.）う:ん（0.6）ずっと封筒でしたっけか？

(2.0)

18 東山：パソコンが確か動かなかったです＝

19 唐多：＝うん（2.0）なんかもう一個くらいやったような気が

20 東山：（2.0）ちょっと（3.6）とりあえず自分はわかんないです

《東山：手で耳をいじる》

21 唐多：わかんない？（3.0）あっ？なんだっけ（.）あの（2.0）ん::と::なんか，製本？

《東山：手であごをいじる》

(1.2)

22 東山：ん？＝

《東山：手の動きが止まる》

23 唐多：＝製本やんなかった？

24 東山：ん（.）あーああ（.）はいはいはい（1.5）ああ（1.5）あれね（.）製本も（.）

《東山：手を強く握り，下におろす》

ホチキス留めと。

《東山：自分のノートに記録する》

《東山：自分のノートに記録する》

25 唐多：製本(3.0) ホチキス留めも(1.4) はいはいと（.）はい（1.0)と（.）はい .hh いちおうこん

《唐多：ノートに記録する》

なもんでしょうかね（1.0）と（.）昼なんでしたか？

3-2-1-3 分析

1行から13行までは，東山と川田が順に「今日やったこと」を想起して指導員の唐多がそれらを記録する，という一連の行為が滞りなく行われていることがみてとれる。

したがって14行以下から具体的にみていくことにしよう。

14行において唐多は，「他になんかやったとかっいうの，方いらっしゃいます？」と述べ，次いで東山を見つめたのち「東山君はほかになんかなかったでしたっけ？」（15行）と直接東山に問い掛けることになるが，東山は「ん？」と述べるにとどまる（16行）。5秒間の沈黙ののち，唐多が「なに，う：ん（0.6）ずっと封筒でしたっけか？」（17行）とさらに問いを具体化しながら，先の「封筒の差出人ラベル作成」以外の行為に関する東山の自発的想起を促すが，2秒間の沈黙の後，東山は「パソコンが確か動かなかったです」と，やや的外れの返答をする（18行）。この返答に間を置かずに唐多は「うん。(2.0) なんかもう一個くらいやったような気が。」（19行）とまたも具体化した問いをなげかけることになる。

問題となるのはここからである。三度にわたる唐多からの問い掛けを受けて，東山はつぎのように発話する。

20 東山：(2.0) ちょっと（3.6）とりあえず自分はわかんないです

東山に与えられた問いの内容に鑑みれば，東山が述べた「わからない」という語は，さしあたり「思い出すことができない」ことを示している。

ここで第2節【事例1B】での議論を思い起こそう。もしも，この東山の発話に続いて唐多が「そうですか，東山さんは忘れてしまったのね。」（あるいは『忘れちゃダメじゃない』）と述べ，さらに東山がこれを拒否することなく話題が終了するのであれば，ここに〈東山は忘却した〉という事実が生じることになる。

しかし，唐多は，続けてつぎのように述べている。

21 唐多：わかんない？（3.0）あっ？なんだっけ（.）あの（2.0）ん::と::なんか，製本？

唐多はここで，東山の「わからない」状態，すなわち「想起できない」状態を，「忘却」とラベリングすることを行っていない。唐多は東山の「わからない」という語に「？」を付与してオウム返しすることで，このラベリングについては保留しているように観察できるのである。ここでは，唐多は健常者あるいは指導員として東山を「忘却者」にする権利があるにもかかわらず，それを行っていないことに着目しておこう。

しかしながら，じつはこの唐多の行為は，単なる唐多ひとりの判断や単なる偶然ではないと考えられる。直前の東山の発話「とりあえず自分はわかんないです」（20行）の「とりあえず」という語に注目してみよう。この「とりあえず」という言及は「暫定的にいえば」あるいは「現在のところ」という意味であることは明らかであって，東山は想起を持続することを必ずしも「放棄」してしまったわけではない（先の事例1A以下を参照）。放棄してないばかりか，むしろ「とりあえず（わからない）」とは，未来の時間における想起の可能性を明瞭に指示する語なのである。20行目における東山の「いま現在において記憶がないこと」の表明は，「忘却」というよりむしろ「想起の持続（厳密には，その最中）」と捉えかえすことも可能であろう。

結局のところ，東山自身も，自ら「思い出せていない状態」であるにもかかわらず自らを「忘却者」として決定付けることは行っていないのである。すなわち，東山は，ここではまだ「想起者」であることを自ら維持している。そうであるならば，先の唐多の行為（東山の『想起できない状態』を忘却としてラベリングしないこと：21行目）はこれを受けて行われたものだと考えることができよう。

さて，このことを押さえたうえで，指導員の唐多のつづく発話「あっ？なんだっけ（.）あの（2.0）ん::と::なんか，製本？」に注目したい。これまでの議論の流れを踏まえて注目しなければならないのは，「なんだっけ（.）あの（2.0）ん::と::」という「私は想起しているのだ」というしるし（標識）[5]である。

唐多はもちろん想起されるべき「正答」を知っている可能性はきわめて高く[6]，ここでは厳密に「思い出している」のではなく，「思い出しているふり」をしているかもしれない，ということも可能ではある[7]。しかし，ここでとりわけ重要なのは，唐多が「自ら想起していることを表す標識」（以下，これを『想起の標識』とよぶ）を提示している，という事実である。すなわちここでは唐多は東山と同様，「想起者」として存在しているのである。

ここで，20−21行に関するこれまでの議論を簡単におさえておこう。

①東山が忘却者になっていないこと②東山が想起者であること③指導員の唐多が想起者であること

では，この箇所をもういちど確認しつつ，それに続く発話をみていこう。

20 東山：（2.0）ちょっと（3.6）とりあえず自分はわかんないです
21 唐多：わかんない？（3.0）あっ？なんだっけ（.）あの（2.0）ん::と::なんか，製本？
（1.2）
22 東山：ん？＝
23 唐多：＝製本やんなかった？

24 東山：ん（.）あーああ（.）はいはいはい（1.5）ああ（1.5）あれね（.）製本も（.）ホチキス留めと

25 唐多―製本（3.0）ホチキス留めも（1.4）はいはいと（.）はい（1.0）と（.）はい

21行，23行における唐多の「製本をやらなかったか？」という発話に，東山は24行において「ん，あーああ，はいはいはい。（1.5）ああ。（1.5）あれね」と述べている。「ああ。あれね」という「製本」を指示する代名詞を用いた発話に注目しよう。この箇所から明らかになるのは次のことである。①東山は自主的には「製本」作業を思い出すことはできなかった。②しかしそれを唐多の提示により再認[8)]することが出来た。

ここで注意しなくてはならないのは，再認したのは東山個人であるけれども，ここでの再認はあくまでも〈共同的に成し遂げられた形式〉である，という点である。当然のことながら，唐多の「あ，なんだっけ，あの，なんか，製本…」・「製本やんなかった？」という発話がなければ，東山の「あーああ，はいはいはい。製本」という発話が導かれることはない。両者は分けることの出来ないペアであるといえる。

そしてもうひとつ重要な点は，唐多の「製本」という提示は，「なんだっけ（.）あの（2.0）ん::と::なんか，製本？」と，唐多自身が想起を試みたすえに「思い出された」形式のなかでなされていた，ということである。つまり，唐多が製本を「思い出し」，次いでこれを東山が「再認できた」のであるから，ここでは両者は〈共同想起者〉である，ということができる。先にいったん記憶がないことに言及した東山がここに想起者として現れている事実は，忘却という現象を捉えなおそうとする本稿の関心からは重要である。

このことについてより詳しく説明しておこう。ここでなされている形式は通常の共同想起場面とまったく同じことであることに注意したい。

――たとえば共に旅行にいった二人のつぎのような会話である。

A「旅行の3日目の午後に行ったのはどこだっけ，えーと，ノートルダム大聖堂…ノートルダム大聖堂行かなかったっけ？　」

B「えーと，そうそう，ノートルダム大聖堂ね。行ったよ。」

この会話にみられる想起形式と，唐多と東山の間でなされた会話とは，形式的にはなんら変わりはない，という点に留意しておきたい。ふたりは「共に」想起しているのである。

なお，24行で東山によって新たに想起された「ホチキス留め」，これについてはあまり多くを議論する必要はないだろう。21－23行での唐多の「製本」という語を手掛かりに，「ホチキス留め」が想起されたのは明らかである。ここでも，唐多の発話を切り離して考えることはできないだろう。

さて，20－25行までの両者の会話についてまとめて考えるならば，次の日常的共同想起事例とほぼ同じ形式になるだろう（先の事例を延長したもの）。

――共に旅行にいった二人の次のような会話である。

A「旅行の3日目の午後に行ったのはどこだっけ，えーと，ノートルダム大聖堂…ノートルダム大聖堂行かなかったっけ？　」

B「えーと，そうそう，ノートルダム大聖堂ね。行ったよ。あと，ルーブル美術館にも行った。」

A「ノートルダム，そしてルーブルにも行ったね。はいはい。」

以上，20−25行において，唐多と東山の二人は「共に想起している」という形式をとっていることがわかった。東山は「忘却者」なのではなく，一貫して「想起者」なのである。

もうひとつだけ注意しておきたいことがある。先にも述べたように，東山の想起が滞った直後の21行の時点において唐多は，「答えは製本でした」というように，正答を示すことも出来たはずである。が，こうした発話は，正答を提示することで，それより先の東山の想起を終了させ，同時に東山を「忘却者」にする機能をもつ。ここでの唐多の，「なんか，製本…」という中途半端に途切れた言いまわしは，想起コミュニケーションを完結させない，いわば開かれた発話の方略である。ついで発話される「製本やんなかった？」という疑問形も，あくまで東山の再認を求めるための「質問」であって，「正答の提示」ではない。すなわち，唐多において，正答を東山に開示し，そのことによって東山を「忘却者」にすることは徹底して留保されているのである。24行の東山の「あーああ，はいはいはい。製本」という確認によって，はじめてそれは両者の共同作業によって「想起された過去」として定位されることになるのである。

では最後に，これまでの流れを「いかにして東山が忘却者にならなかったのか」という観点から，まとめておこう。

①東山は，〈記憶がない〉ことを表明しながらも，それが「忘却」ではなく，あくまでも限定された現在の状況に過ぎないことを同時に表明し，想起を継続することを自ら示している。

②唐多は，東山の〈記憶がない〉状態を「忘却」とラベリングする権利があるにも関わらず，それを行っていない。

③唐多は，東山が想起するべき事柄を知っている者（である可能性が極めて高い）にもかかわらず，それを回答として提示しない。これは東山を忘却者にしないひとつの方法である。

④唐多は，想起の標識を提示することで，自らを想起者として定位した。そして，東山は，この標識とともにあらわれた唐多の想起によって，それを再認することが可能になっただけではなく，新たな一項目を自ら再生することが出来た。この過程において，唐多と東山は「共同想起者」になることが出来たといえる。

3-2-2 【会話断片２】の分析

3-2-2-1 はじめに

本節において分析の対象となるのは，2002年９月Ｙ日の「終わりの会」における会話である。

当日の参加者は，唐多指導員，塩原，葉山，川田，草野，田辺指導員，窪塚，である。

先に述べたように，この日の会合において忘却が問題になるような場面は，以下にあげる会話断片２のみであった。まずはその内容をみていくことにしよう。

（発話者の前の数字は行数をあらわす。なお，断片において用いられている記号については，文末の注4)を参照のこと）

3-2-2-2　会話断片 2

【会話断片 2】

1 唐多：じゃあ (.) 次の方
　　(0.4)
2 窪塚：はい
3 唐多：はい
　　(1.2)
4 窪塚：あっ
5 唐多：ん？
6 窪塚：いいですか？
7 唐多：いいですよ
　　(1.2)
8 窪塚：話が (.) ためになりました
9 唐多：話がため ┌ になった＝
10 窪塚：　　　 └ はい
11 唐多：＝家安さんのはなし？＝
12 窪塚：＝はい
　　(2.4)《唐多の隣にいた小原指導員が別室にいた役員によばれて退席する》
13 唐多：家安さんの (1.0) うん (.) どんなとこがためになった : : かな : ?
　　(6.0)
14 唐多：うん
15 窪塚：（くらい hh)
16 唐多：うん
17 窪塚：はぁ : : hh (3.0) あ h : : なんだっけなあ (4.0) .h ┌ uh 忘れちゃだめだよねぇ uhh?=
18 唐多：　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 └ uh
19 唐多：=ahh ううん (.) いやいやべつに (.) あの (0.6) (.) うん (.) いま (.) いますぐ思いつくことでもいいんだけど (0.6) なんか (.) 印象に残ってることとか (.) あれば
　　(3.5)
20 窪塚：はぁ：ほかの (.) ほかの：
21 唐多：うん (.) うん (.) ほかの：(1.6) うん
22 窪塚：病院っつうか＝
23 唐多：＝うんうんうん
24 窪塚：そういう感じ
　　(.)
25 唐多：うんうんうん
　　(.)
26 窪塚：あっ (.) あった↑ありましたよね？＝

27 唐多：＝うんうんあったあった（1.6）うん（1.0）うん（.）あの家安さんがいるとこではどんなことやってるかとかね？そういうことでしょ？（1.0）うん

(3.5)

28 窪塚：そうですね＝

29 唐多：＝うん他の：(0.5) 施設というか：(.) の病院 (.) 病院とか施設の話 (.) やり方 (.) やってることが聞け↑て (.) ためになったと

30 窪塚：はい＝

31 唐多：＝はい（1.4）聞けた（.）とはい（0.6）はい（1.0）はい

(1.8)

32 田辺：マージャンは？

(.)

33 窪塚：マージャン？hh 感想だと (.) マージャン h？(.) なんかしょぼかった (.) 今日 ┌ hh

34 唐多： └ hh

マージャンはしょぼか h った hh（2.0）しょぼかったんだ：

35 窪塚：うん

(1.4)

36 唐多：はい

37 窪塚：いつもしょぼいけど＝

38 唐多：＝h いつもしょ ┌ ぼいhhhhhhhhhhhh

38 窪塚： └ 今日はいつにも増してhhhh

(2.0)

39 唐多：そうなんだ（0.8）はい（.）以上ですか？＝

40 窪塚：＝以上です＝

41 唐多：＝はい（0.6）どうも：じゃ，次の方

3-2-2-3 分析

この断片は，断片1同様，指導員の唐多が司会となって「今日あったこと」をメンバーに問うている場面である。

窪塚は6行で「いいですか？」と発話の権利が自分にあることを唐多に確認したのち，8行－12行において「家安さん（筆者注：午前中に訪れた，病院の療法士）の話がためになった」と述べている。

この断片で問題となるのは13行以下の部分である。さしあたり18行までを再確認しながら分析してみよう。

13 唐多：家安さんの（1.0）うん（.）どんなとこがためになった::かな:?

(6.0)

14 唐多：うん

15 窪塚：（くらい hh）

16 唐多：うん
17 窪塚：はぁ：：hh (3.0) あ h：：なんだっけなあ (4.0) .h ┌ uh 忘れちゃだめだよねぇ uhh?=
18 唐多：　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└ uh

13行で唐多が「家安さんの (1.0) うん (.) どんなとこがためになった：：かな：?」と問うたのちに6秒間の沈黙が生じている。この沈黙がどのような意味を持つのか，ここからは観察することは困難である（これを即座に『窪塚が想起できない状態』と判断する積極的な材料はない）。しかし，17行における窪塚の「はぁ：：hh (3.0) あ h：：なんだっけなあ (4.0) .」という発話からは，窪塚が「想起を試みているが，さしあたりは『記憶がない』状態である」ということが確認できる。

それに続けて窪塚は「uh 忘れちゃだめだよねぇ uhh？」と述べる。ここから断片1の分析と同じ視点をもって細かくみていこう。

まず「忘れる」という語に注目しよう。彼は自らの「記憶がない状態」を「忘却」と判定して自らを「忘却者」にしているのだろうか？　ここで注意すべきは，「忘れちゃだめだよね」という箇所である。ここにみられる「忘れちゃだめ」という語は「忘れ『たら』だめ」あるいは「忘れてしまっ『たら』だめ」を意味するのであって，あくまでも仮定法的に用いられている。ここで「忘却」は仮定法的空間のなかに留まっているのであって，未だ忘却が現実に＜達成＞されているわけではないのである。さらに，「忘れちゃだめだよね『？』」と発話に疑問形の形式が用いられている事実にも注目しよう。疑問形とはとりもなおさず「他者に問い，答えを請う」形式であって，ここで自らが「忘却者」であるか否かの判断は唐多の手に委ねられているのである。すなわち，ここでも再び，忘却は達成されていないといえよう。

もうひとつ，「忘れちゃだめだよね？」という発話が自らの笑い声（uh, uhh）によって前後から挟まれている点にも注意が必要かもしれない。笑いを伴う発話が「冗談」であるか否かについての判断はもちろん慎重でなければならないが，窪塚は，「忘れる」という語を自らの笑いに包みこむことによって，「いまは忘れているわけではない」ことを暗に示し，忘却の達成を間接的に回避していると考えることも不可能ではないだろう。なお唐多においてもほぼ同様の時期に笑いが生じていることにも注意しておきたい。窪塚の「忘れちゃだめだよね」という発話の前後において，唐多は「uh」(18行)，「hh」(19行) と二度笑いを起こしているのである。

さて，これまでの点を再確認しつつ，視点を次のやりとりへと移行し経過を辿っていこう。

17 窪塚：はぁ：：hh (3.0) あ h：：なんだっけなあ (4.0) .h ┌ uh 忘れちゃだめだよねぇ uhh?=
18 唐多：　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└ uh
19 唐多：=ahhうう：ん (.) いやいやべつに (.) あの (0.6) (.) うん (.) いま (.) いますぐ思いつくことでもいいんだけど (0.6) なんか (.) 印象に残ってることとか (.) あれば
(3.5)
20 窪塚：はぁ:ほかの (.) ほかの：

先に，「忘れちゃだめだよねぇ？」と窪塚に「忘却者」であるか否かの判断を委ねられたかたち

の唐多は，次いで（19行）「ううん，いやいやべつに（.）」と，（間接的な）否定を行う。

さて，先の会話断片1と同様，ここで仮に唐多が「そう，忘れちゃだめだよ。」と窪塚のことばをそのまま用いて返答したとすれば，どのような状況に変化するか，考えておくことにしよう。先に述べたようにこの「忘れ『ちゃ』」という文節は仮定法が用いられているのであるから，この唐多の肯定のみによって，窪塚が忘却者になることはないだろう。しかし，たとえば唐多が「そう，忘れちゃだめだよ。今回はいいから次回から忘れないようにね。」といったように付け加えた場合はどうだろうか。この発話は，想起できていないままの現在の窪塚の事態を，「今回はもういいから」という語によって，完了させることになる。すなわち，この発話は窪塚の「想起の持続」の可能性を消去するとともに，「忘却」をあらわにする契機を含んでいるといえよう。そして唐多のこの発話が次いで窪塚に否定されないようであれば，窪塚は，自らの想起ができない状態に「忘れた」というラベリングを受けることになり，「忘却者」として存在することになる。

あるいは，もっとストレートに唐多が「窪塚君，忘れちゃったんだ。」と述べ，窪塚が否定をしなければ，窪塚は即，忘却者となるだろう。

いずれにせよ重要なのは，唐多はメンバーの行動を把握している指導員としてこうした発話を行う権利を有しているにもかかわらず，それを行っていない，という点である。

会話の流れにもどろう。19行において唐多は短い沈黙（0.6秒）の後「うん，いま，いますぐ思いつくことでもいいんだけど。（0.6）なんか，印象に残ってることとか，あれば。」と述べる。ここで注目すべきは「いますぐ思いつくこと」を唐多が促していることである。「いますぐ」という表現が指示している時間は，必ずしも瞬間としての現在時ではなく，現在より先の未来である（たとえば『さあ，いますぐ』という表現が，『いま』という現在よりもむしろ少し先の未来を指示していることからも明らかであろう。）。すなわち，唐多は，ここで未来に向かっての想起を窪塚に促している。窪塚がさしあたり現在のところ「記憶がない状態」であったことに注意しよう。先の第2節の議論を思い起こすなら，窪塚は現在において記憶がない状態にあるが，必ずしも「忘れた」ことは達成されておらず，想起を続ける権利を有している。すなわち，唐多はここで，「記憶がない」という窪塚の〈さしあたりの現在〉の時間を停止させず，想起の可能性を包含する〈未来〉の時間へと拡張し，「想起の持続」を促しているように観察できる。

そして，この想起の促しを受け，果たして窪塚は想起を開始することになる。

19 唐多：=hh ううん（.）いやいやべつに（.）あの（0.6）（.）うん（.）いま（.）いますぐ思いつくことでもいいんだけど（0.6）なんか（.）印象に残ってることとか（.）あれば
(3.5)
20 窪塚：はぁ：ほかの（.）ほかの：
21 唐多：うん（.）うん（.）ほかの：（1.6）うん
22 窪塚：病院っつうか=
23 唐多：=うんうんうん

24 窪塚：そういう感じ
(.)
25 唐多：うんうんうん
(.)
26 窪塚：あっ (.) あった↑ありましたよね？＝
27 唐多：＝うんうんあったあった (1.6) うん (1.0) うん (.) あの家安さんがいるとこではどんなことやってるかとかね？そういうことでしょ？ (1.0) うん
(3.5)
28 窪塚：そうですね＝
29 唐多：＝うん他の：(0.5) 施設というか：(.) の病院 (.) 病院とか施設の話 (.) やり方 (.) やってることが聞け↑てためになったと
30 窪塚：はい＝
31 唐多：＝はい (1.4) 聞けた (.) とはい (0.6) はい (1.0) はい

19行において唐多に想起を促された窪塚は，約3.5秒の間をあけて「はぁ:ほかの，ほかの:」(20行) と発話を開始する。これを受け，唐多は「うん，うん (.) ほかの：(1.6) うん 」(21行) と，窪塚の言葉を引用しつつ，うなづきを多用することによって，つづく発話を促している。続けて窪塚は「病院っつうか」(22行) と述べ，それを受けた唐多は，即座に (文末の注4)『＝』の記号を参照)「うんうんうん」(23行) と更に3度うなづく。次いで窪塚は，「そういう感じ」(24行) と述べる。

ここで窪塚の想起はじっさい終了しているのであるが，第三者にとってはその内容はいまひとつ把握しがたい。それにもかかわらず窪塚は，「↑あっ，あった，ありましたよね？」(26行) と，音調を極端に上げ (記号『↑』)，言葉を重ねながら，唐多に自らの想起が事実であることの確認をしようとする。つづいて，唐多は，「うん，あの家安さんがいるとこではどんなことやってるかとかね？そういうことでしょ？ (1.0) うん」(27行) と述べる。この発話はこれまでのやや不十分な窪塚の想起に対する翻訳あるいは解釈として働いているといえよう。誤解してはならないのは，ここで唐多が新たな情報を付加して窪塚に提示しているのではないということだ。新たな情報を窪塚に提示することは，ある種の正答を提示することに他ならず，そのことによって，窪塚の想起の持続を終了させ，彼を忘却者にしてしまう (先の会話断片1の分析を参照)。

この唐多の翻訳 (解釈) に対し，窪塚は28行で「そうですね」と述べる。29−31行においても同様に翻訳 (解釈) →受容というやりとりが生じて，想起は終了となる。

さて，後半の流れをここでまとめておこう。窪塚の不十分な想起→唐多の受容→窪塚の確認→唐多の受容，翻訳 (解釈) →窪塚の受容。こういう図式になるだろう。このやりとりにおいては，唐多は，断片1での分析でみたような「共同想起者」にはなりえていない。しかし，先に確認したように，唐多は，窪塚を「私は想起できない」という次元に留まらせずに，彼が想起をつづけることを可能にする作業を行った。すなわち，唐多は，窪塚が「想起者」になることを支え，支援するものとしての役割は最低限果たしているといえるだろう。

この一連の発話が終了した32行以降，**話題が転換し**，マージャンの感想などが述べられ，39行で唐多が「はい，以上ですか？」と想起の**終了を示唆し**，それが窪塚に受容されてやりとりは終了と

なる。

39 唐多：そうなんだ（0.8）はい（.）以上ですか？＝
40 窪塚：＝以上です＝
41 唐多：＝はい（0.6）どうも：じゃ，次の方

最後に，断片１の分析同様，これまでの流れを「いかにして窪塚が忘却者にならなかったのか」という観点から，まとめておこう。

①窪塚は，〈記憶がない〉ことを表明し，それを自ら「忘れる」という語でいったんはラベリングしながらも，「忘れちゃだめだよね？」と仮定法を用いてじっさいには忘却が達成されないようにしている。同時に，疑問形を用いてこのラベリングの是非を唐多に委ねている。

②唐多は，窪塚から委ねられた「忘れる」というラベリングを肯定する権利があるにもかかわらず，それを行わず，窪塚が忘却者になることを回避している。同時に唐多は，未来の時間における想起を窪塚に促すことで，彼の想起を「持続」させようとしている。

③ ②を受けて，窪塚は新たな情報を想起することが可能となった。ここにおいて，窪塚は忘却者でなく想起者となることが出来た。

4 包括的考察

4-1 分析をふりかえって

以上，【会話断片１】と【会話断片２】を通して，会話の詳細な分析を行ってきた。分析をふりかえってごく簡単にまとめをしておこう。

高次脳機能障害者は，いっぱんに「高次の認知機能が十全に働かない」者として定義される。記憶に焦点をあてた本稿の視点からいえば，「記憶力が十分でない」者である。

ところが，「記憶力が十分でない」とされる者が集う作業所「コロポックル」での筆者の観察においては，「忘れる」という現象がほとんど顕在化しなかった。これは単に，彼らの周囲の健常者が用意周到に援助を行っているからであるとか，彼らが記憶を殆ど必要としないルーティーンの日常を送っているから，あるいは，彼らがそもそも想起自体を行っていないから，などといった要因によるものではなかった。

彼らの日常には，確かに「かつての記憶が無い」状態が見られた。これは，「記憶が無い＝忘却」という旧来の観念にとりつかれたままに「忘却」をめざとく見つけ出そうとする第三者からみれば，至るところ忘却が存在するような状態であろう。しかし実際には，それはまさしく「記憶が無い」状態でありながら，その状態は「忘却」へと変換されることはなかった。そこにあったのは，忘却の回避，そして，「記憶が無い」状態を「想起の持続」へと変換し，最終的には「想起の達成」へと導く過程であった。そしてここに働いていたのはさまざまな言語（非言語）装置――語法の利用，想起標識の利用，時間の更新，笑いの利用，――である。

これらの装置が機能するためには，「記憶が無い」者とそれを取り巻く他者（対話者）とのコミュニケーションが不可欠であったことも忘れてはならない。「忘却の回避」，そして「想起の持続」とは，記憶の不在にかかわる複数の人間のうちに共同で成し遂げられるものであった。

「記憶がない」ことはかならずしも「忘却」ではない。このことは何度強調しても，し足りないということはないだろう。「記憶がない」という現象は，「(言語) 行為」と「他者」という要因が関わることで，「忘却」にもなり，また「想起の持続」という過程にもなりうるのである。

4-2 「忘却の回避」から「想起の共同体の生成」へ

4-2-1 「忘却の回避」と「想起の可能性」

さいごに「なぜ，忘却の達成が回避される必要があるのか」という問題が残されている。むろん，今回提示した事例のみから直接この問いに答えるのは性急に過ぎるだろう。いうまでもなく，コロポックルにおける活動の全体性を継時的かつ緻密に分析した結果から，この種の議論が興されなければならない。だが，本稿の結果をより大きな文脈に位置付けて論じるかたちであるならば，多少の推論を含めた議論は許されよう。最後にそれを述べておくことにしよう。

コロポックルの指導員は，忘却が至るところで達成されることによりメンバーが「忘却者」としてのアイデンティティを自らに定位することを回避しようと努めているように思われる。これは一見ごくあたりまえのようにみえるが，この含意は見た目ほど単純ではないと思われる。

冒頭にも述べたとおり，高次脳機能障害者は，記憶にかんしていえば常に「忘却者」のラベリングに極めて近い位置にある。しかし，「自らを『記憶障害者』であると認めること」と「自らを『忘却者』であると認めること」とは，同じようでありながら，そこには大きな隔たりがあることに気づかねばならない。もちろん障害者が自らの障害をありのままに受け入れること自体は必要であろうが，高次脳機能障害者が自らに「忘却者」のラベルを付与することには大きな危険が伴うと思われる。

考えてみれば明らかなように，そもそも人間とは，障害のあるなしにかかわらず，想起の試行前に想起の結果を予測できる存在ではない。だれしも，思い出せないはずと思っていたこと，あるいは思い出せないはずと周囲に評価されていたことを，思い出す「試み」によって思い出せることがあるだろう。想起は「やってみなければわからない」行為の一種である。したがって，理論的に想起能力が完全にゼロでなければ，想起への努力が全くの無駄となる可能性もまた，ゼロではない。想起の可能性とは，事前に予測されるものではなく，また，固定的な値として診断・計測できるものでは断じてない。それは，「想起を試みた，その後に」仮の姿で暫定的に現れ出るものにすぎない。想起の可能性は，未来の時間へと常に開かれている。

したがって自らを忘却者とアイデンティファイすることは，想起が本来的にもつこの「可能的な性質」に反して，想起の「不可能性」を自らへ固着化することにつながる。自らを忘却者，すなわち想起出来ない者とみなすものは，想起を試みる努力を日常的に怠り，またそうであるがゆえに，これまでの分析にみられたような「記憶の不在」を「想起の持続」へと変換する共同作業に参加する契機も失われていくに違いない。彼はあらゆる意味において，自らの想起の可能性を自ら消すことになるだろう。

4-2-2 「想起の共同体」へ

もちろん，脳の器質的な問題により記憶の産出がかなり困難な者がいるのも事実である。しかし，そうした者であっても，「えーと，うーんと，なんだっけ」といったような「想起の標識」(前出)

を提示すること自体は可能である。そしてこの行為は，それによって自らの想起が持続している（あるいは，いままさに持続しようとしている）ことを他者に知らしめ，結果的に他者を巻き込んで何らかの「共同想起」を興す可能性を持つ。もちろん，その過程において，偶発的ながらも自律的想起が可能になることもあろうし，他者からの情報提示によって「再認」が可能になることもあるだろう（先の分析事例を参照）。場合によっては，自らの記憶をほとんど使用せずとも，周囲の人たちから適切に援助を引き出すことによって，望む過去へと到達できることもあるだろう。「想起の標識」は，あらゆる想起のはじまりとして機能する。

この最後のケースについては「もはや個人の記憶という範疇を超えている」といぶかる向きもあろう。しかし前段落において重要なのは，記憶障害を持つ者が自ら「想起の標識」を出すことによって，他者をその想起へと巻き込み，結果的には自らの求める過去へと到達できる，という構造の共通性である。ここでは，「ひとりで頭の中から記憶を呼び戻す」という旧来の実験室的な記憶のイメージをとりあえず脇において，「自ら能動的に周囲の力を利用し過去を再現する」というイメージのリアリティに目を向けてみよう。

障害者であろうとなかろうと，ひとは他者や事物との関わりの中で生きざるを得ない。この事実を直視するならば，旧来の，ひとりで自らの頭蓋の中を覗き込む「記憶」のイメージからはある程度自由にならなければならない。そうでなければ，「思い出す」行為，そして本稿のテーマである「忘れる」ことに関わるあらゆる日常活動の本質をすくいあげることはできないだろう。我々の日常を見渡すにつけても，このことは明らかである。たとえば我々は，「メモ」や「ノート」，「あてになる知人」といったものをうまく利用しながら生活しているが，果たして，こうした「記憶補助」を能動的に用いて過去にアクセスできる人を「忘却者」と呼ぶだろうか？　あるいは，秘書がついてなければ何もできない社長や重役を「無能者」と呼ぶだろうか？　いうまでもなく，一定のシチュエーションにおいて，他者や事物をある種の記憶補助装置として能動的に使いこなせるのであれば，自らの記憶資源をほとんど用いなかったとしても（同様，自らに記憶資源がほとんどなかったとしても）その人物は「忘却者」や「無能者」としてはみなされないのである。

ここで，「想起」という概念を，自らの能動的な所作によって過去を出現させること，と幅広く定義することが許されるのであれば，個人の頭蓋に閉じた「記憶」の産出との違いが明確になるだろう。この定義にならえば，本節において強調しておきたいもうひとつの点は次のようなことである——他者と共につくられる場において，「想起」できるかできないかという問題は，個人の「記憶」能力とは直接的な因果関係がない。いかに記憶能力が欠如した者であっても，周囲とのかかわりを特定の方向へ機能させることで，過去に到達すること自体は可能なのである。「想起能力は，個人の記憶能力とは異なる」という命題の可能性は，高次能機能障害者の「思い出す」・「忘れる」活動を周囲との関係において適切に捉えようとする際には忘れられてはならないだろう。

こうした観点を切り開いてゆくことによって，前節で議論された「想起の可能性」は，より大きな広がりを獲得することになるだろう。

さて当然のことながら，分析においてみたような指導者とメンバー間でつくられた共同想起の形態が，他のメンバー同士のあいだに次第に広がる可能性についても触れておくべきであろう（実際コロポックルにおいては既に実現されているように思われる。この詳細な分析については別稿にて

展開したい)。このとき，メンバー同士は互いに記憶を相補いながらひとつの過去の形成を成し遂げることになるだろう。たとえば，A氏はB氏の記憶補助になりつつ，B氏はC氏の記憶補助になりつつ，そしてCはA氏の記憶補助になりつつ…といった，相当に複雑な関係（おそらく現実はこれ以上に複雑である）が形成される**可能性がある**。こうした状況における想起活動は，先述したように，個の頭蓋という限定された空間に閉じてなされるものではない。ここには，個という単位を超越した，ひとつの集団を単位とした「記憶のネットワーク」＝「想起の共同体」が生成されている。

もちろんこうした関係は，メンバー同士という単位を超えて，さらにコロポックルという組織の外側に展開する世界の成員をも巻き込みながら，より大きな想起の共同体が作られる可能性へと開かれていくはずである。そしてこの可能性とは，とりもなおさず「メンバーの社会復帰」の可能性へと繋がることはいうまでもない。

実際，多くの活動理論研究（健常者に関するものではあるが）が示しているように，ある仕事が共同で成し遂げられるときには，作業の有機的分担／共有が行われるとともに「記憶の分担／共有」がなされている。本稿のことばでいうならば，まさに「想起の共同体」が実現されているのであり，ここでは，個人単位での記憶能力が十全でなくとも，互いが互いの記憶をカバーし高めあうように働くことで，結果として全体の作業が円滑に進行するよう機能しているのである。

＊　　＊　　＊

記憶それ自体は，目には見えにくいという特徴がある。極言すれば，記憶「そのもの」を見ることは誰にとっても不可能である。記憶それ自体は具体的な行為ではなく，また，現在のところ特定化できる物質でもない。記憶は身体内部に貯蔵されているものに違いないが，その状態を誰も正確に記述することはできないのである（松島，2002)。記憶とは，想起という発話／行為実践から逆向的に推定される（森，1998）だけの，いわば抽象的概念であるといってもよい。

こうした点を踏まえて考えるなら，「記憶障害」をもつといわれる高次脳機能障害者が，本稿において観察できたような発話のやりとりを行うことは，彼らの「見えない障害」[9]を巡る問題としても極めて重要であることが示唆されよう。ただし間違ってはならないのは，これは，たんに「見えない障害」それ自体を見えやすくする――すなわち，「記憶障害」を露わにする――ということではないし，またその逆，すなわち，彼らの障害を隠蔽することでもない。

繰り返しみてきたように，彼らにおいて思い出そうという「想起の持続」への構えが少しでもある限り，それは何らかの「想起の標識」として（**『忘却の表示』ではなく**）公共の場にあらわれることになる。こうした想起の標識が少しでも提示されることによって，「見えない障害」といわれる高次脳機能障害の一端が，**『ネガティブではない』**かたちで――すなわち「私は多くを忘れている」ではなく「私は多くを思い出そうとしている」という表現として――知覚され，同時に公共的なものになりうる。こうして彼ら高次脳機能障害者が「忘却者」でなく「想起者」としてあらわれることは，彼らに対して周囲の者がどのような構えで手を差し伸べるかという態度の変容にも繋がる可能性を多分に秘めている――すなわち，想起が〈出来ない者〉に対する援助ではなく，想起を〈しようと試みる者〉に対する支援として。あるいは，〈可哀想な者に対する手助け〉ではなく，〈彼の想起に参加しようとする能動的行い〉として。

※本論文は，未公刊の報告書「高次脳機能障害プロジェクト研究第一回報告書」（相互支援コミュニティ発達プロジェクト編，2003年３月）所収の筆者による論文「『記憶の不在』は忘却か？－高次脳機能障害者共同作業所における想起コミュニケーション分析から」に修正を施したものである。編者である相互支援コミュニティ発達プロジェクトとは，本論で採り上げた「コロポックル」の生活指導員と大学に所属する研究者数名により組織された共同研究プロジェクトである。

注

1) 高次脳機能障害とは，事故や病気によって脳組織が損傷されたため，言語・記憶・思考・注意など高次の認知機能に変調をきたす障害のことである。この障害は，前向性健忘（新しいことの記憶），注意欠陥障害といった特定の認知機能の障害としてあらわれることが多いため，身体能力（ADL 等）や知的能力は回復したにもかかわらず社会復帰が困難になる場合が多い。そのため高次脳機能障害において障害認定・機能回復（機能障害）に関する医学的・福祉的方法論の確立が必要とされると同時に，社会復帰（社会的障害）に関する実践研究が急務とされている。

2) 友の会「コロポックル」を運営母体として，1999年３月に小規模作業所「コロポックル」が発足し，2003年４月に，クラブハウス「コロポックル」に改称された。

3) 分析対象日が特定されると参加者も特定されるおそれがあるので，X，Yの記号を用いた。なお，分析対象日に一年間の間隔があることには特別な意味はない。観察者の都合により観察日が限定されたことと，得られたデータのうち音声が明瞭に聞き取れるものを選択したことが関係している。

4) 凡例：(以下の記号は，G.ジェファソンによって開発され，西阪によって翻訳されたもの（西阪，2001）を援用している。)

⊏は複数の音声が重なりはじめた部分を示す。
＝は二つの発話に途切れが無いことを示す。
（ ）は聞き取り困難を示し，（ ）内の語は，聞き取りが確定できない文字列を示す。
(数字) は音声が途絶えていることを示し，その秒数はほぼ0.2秒ごとに（ ）内に示される。
0.2秒以下の短い間合いは（.）という記号によって示される。
:: は音声の引き延ばしを示す。: の数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。
－は言葉が不完全なまま途切れていることを示す。
hh は呼気音，.hh は吸気音を示す。Ahaha，uhh，hehe 等は音声化された笑いを示す。
？は語尾の音が上がっていることを示す。↑は音調の極端な上がりを示す。
発話列上方（下方）の記号┌┐は，同時に《 》内の行為が生じたことを示す。

例）　《鈴木：振り返る》
　　┌┐
高橋：あれ，なんだ？

解説）高橋の「なんだ」という発話と同時に，鈴木が振り返ったことを示している。

5) 西阪（2001）は，こうした標識を「想起の試みの標識」と呼び，会話を滞りなく進行させる機能的観点から考察を行っている。

6) 25行にあるように，一連のやりとりのあと，彼女はこれ以上想起すべき事柄がないことを自ら表明し，想起のやりとりの終了を宣言している。こうした態度をとることができるのは，想起されるべき事柄を知っている者に限られる。

7) それが「ふり」であるかどうかは，ここでは重要でない。先に述べたように，この分析では，外側から観察する事実にもとづいて，会話がどのような形式をとっているかを見ていくことが重要である。
あるいはこの箇所を「唐多は『製本』というヒントを出すことを躊躇している状態なのだ」，というふうにみなすことも出来るかもしれない。が，こういった内面の解釈は，議論の無限後退に陥るおそれがあるし，なによりも，本論の議論の流れからみれば，ここではほとんど重要ではない。

8) 心理学（認知心理学）においては，かつての経験を他の助けを借りず自発的に想起することを「再生」とよび，他者の提示に対してそれがかつての経験であったことを確認することを「再認」とよぶ。

9) 高次脳機能障害は，外部から観察できる障害が少ないうえ，近年にわかに増加してきた障害であるとい

うことから，未だ多くの人々に理解されず，そのことが社会復帰を妨げているといわれている。

引用文献

松島恵介「記憶の持続　自己の持続」(金子書房，2002)
森直久　私信，1998
西阪仰「心と行為—エスノメソドロジーの視点」(岩波書店，2001)
Ryle,G.1949. The Concept of Mind. Middlesex : Peregrine Books, 1963.